

## 歴史的事象の課題を追究し、主体的・対話的に学ぶ生徒の育成

～見方・考え方を働かせる「問い」の活用を通して～

南風原町立南風原中学校教諭 仲間大輔

### I テーマ設定の理由

中央教育審議会は『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（2021年1月答申）以下、「答申」の中で、急激に変化する令和の時代を先行き不透明な「予測困難な時代」、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」が到来しつつあることを指摘している。このような時代に対応するために、自分のよさや可能性を認識し、他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、乗り越えることが必要とされている。

これに先立って、文部科学省（2018a）『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説社会編』（以下、『社会編』）では、これまでの「生きる力」をより具体化し、「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していく」（文部科学省2018 p.3）と述べており、授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」を示している。また、その実現のためには、授業改善や「見方・考え方」を働かせることの重要性や基礎的・基本的な知識及び技能の習得についても述べている。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力を育成するためには、「社会的な見方・考え方」を働かせながら、単元を見通した「問い」の設定についての必要性も示している。生徒が主体的に動き、考え、目線をどこに向けるのかが重要であり、「学びたい」という主体性や「何のために学ぶのか」といった追究の根幹となる学びに向かう力の育成が大前提であると考えられる。

これまでの授業実践では、単元や授業の導入場面で、生徒の興味関心を引きつける術や活動を優先して実践を行ってきた。社会的事象の知識や結果のみを問う、完結型の学習活動になっており、社会的事象に対して、新たな「問い」を生み出せない学習活動になっていた。そのため、もっと知りたい、もっと調べたいといった主体的な学習態度を養うことができず、深い学びにつながらなかったと反省する。

本校1年1組の生徒の実態として、6月に実施したハイパーQUテストでは、「親和的なまとまりのある学級集団」と判定され、今後の指針としては、生徒たちに考えさせ、主体的に計画、活動、振り返りをさせることで、さらに高まると診断されている。しかし、沖縄県児童生徒質問紙調査における小学6年生（11月）時と中学1年生（7月）時の家庭における学習計画や授業における課題解決に向けての質問結果を比較すると、いずれも下降傾向にあり、課題を追究する授業形態、授業につながる家庭学習の在り方について改善すべき点があり、教師自身の授業改善と生徒の意識改革をする必要がある。

そこで、『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ』（2022）の重点事項である「自立した学習者の育成」取組1の「問い」を持つこと、学びの質を高める「5つの方策」にある質的授業改善の「日常化する」支持的風土を図る「つなぐ」、地域連携の「支える」を意識しながら主体的・対話的な学びを深めたい。また、『問いが生まれるサポートガイド』（2022）の「問い」「協働」「振り返り」「新たな問い」、『自学自習ガイド』（2022）の「自学自習力」を参考にして、見方・考え方を働かせる効果的な「問い」の活用を取り入れた授業実践と自学自習を連動したい。単元に見通しを立て、単元を貫いた「問い」をベースに社会的な見方・考え方を働かせながら課題を追究・解決に向かう授業展開と家庭における自学自習を連動させることにより主体的・対話的で深い学びが育まれると考え、本テーマを設定した。

## II 研究仮説と検証計画

### 1 研究仮説

見方・考え方を働かせる「問い」を活用し、課題を追究する授業展開と自学自習を連動する過程で、知識・技能を習得・活用しながら主体的・対話的で深い学びにつながるができるであろう。

### 2 検証計画

表 1 検証計画

検証授業の対象：南風原中学校 1 年 1 組 男子 16 名 女子 17 名		主な検証方法
1 事前調査	生徒実態調査（12 月）振り返り・自学自習・定期テスト	・アンケートによる分析
2 検証授業	検証日程	検証の観点
	【課題把握】単元を貫く問いの見通し ①	①「問い」の活用が効果的であったか
	【課題追究】社会的事象・要因を追究 ②③④⑤	② 生徒が主体となった課題追究的な授業であったか
	【課題解決】記述式問題作成 ⑥	③「対話的」「協働的」な学びが見える授業であったか
3 事後調査	生徒実態調査（1 月）振り返り・自学自習・定期テスト	・アンケートによる分析
4 まとめ	①見方・考え方を働かせる「問い」の活用	①振り返り②新たな「問い」
	②課題追究・解決的な授業の過程で知識・技能の習得	③記述問題正答率
	③学びに向かう力を育み、自立して学ぶ自学自習につながる	上記①②③の比較

## III 研究内容

研究テーマに迫るため「主体的・対話的で深い学び」「歴史的事象の課題を追究・解決する授業」「見方・考え方を働かせる『問い』の活用」「ICT の利活用と保護者参加型の自学自習」について研究する。また、本研究に基づいた「単元を貫く 10 の実践」**A~J**（後述）を本検証授業で展開する。

### 1 主体的・対話的で深い学び

これまでの私の社会科授業における課題は、知識を詰め込む「教える授業」、重要語句を調べ暗記する「覚える授業」、テストに向けた「対策授業」、対話的な活動はあるが、授業の本質にせまらない「知識習得的授業」に偏っていたと考える。このような課題を解決するため、本研究では、教師自身が明確な視点を持つことが重要である。目指すべき社会科の授業は、課題を追究・解決する過程で資質・能力を育むことである。主体的・対話的で深い学びに向けて「導く」存在であることが理想である。「導く」ために単元を通して、どのような視点を持って授業を構想するかが重要となってくる。

中央教育審議会(2018)は、授業改善の視点として、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」、自分の考えを広げ深める「対話的な学び」、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」と示している。文部科学省(2018b)『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）』では、「見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視」と示している。また、『社会編 p.170』では、視点として「見通し」「振り返り」「対話」「生徒が考える」「教師が教える」場面をどこに設定するか等を示している。

本研究では、「授業の視点を明確にする」「単元を貫く見通しを持つ」「単元を貫く『問い』を設定する」「対話を通して生徒が考える場面を設定する」「教師が教える場面を極力抑える」「振り返りを活用する」を重点事項とする。「教師が説明する」授業から、対話や協働を中心とした「生徒に委ねる」生徒主体の授業となるように単元計画に沿った主体的・対話的で深い学びに向かう課題追究・解決的な活動を中心とした授業を実践する。

## 2 歴史的事象の課題を追究・解決する授業

### (1) 課題追究・解決的な授業について

中央教育審議会(2016)「社会・地理歴史・公民ワーキンググループ」は、主体的・対話的で深い学びを意図した学習過程のイメージとして、動機付け・方向付けの「課題把握」、情報収集・考察・構想の「課題追究」、まとめ・振り返りの「課題解決」としている。廣島(2017)は、『主体的・対話的で深い学び』を実現する大前提は、課題解決的な学習を構想すること」を挙げ、「それだけで『主体的・対話的で深い学び』が実現するわけではない」と述べ、表2のように、課題追究・解決的な学習時の学びの視点を挙げている。課題追究・解決的な活動を重視した授業の課程では、「単元の見通し」を持つことが大切になってくる。本研究では、「単元の見通し」として、単元をひとつのストーリーとして組み立てる。第1時、第2時、第3時と、それぞれの授業を物語のようにつなげることで生徒の理解が深まるように工夫する。課題把握の場面において、単元を貫く「問い」を予想することで見通しを持ち、課題追究に向かっていく。安井(1982 p.60)は、古代ローマの単元で、「子どもは、スジ道をたどって、教材を主体的に受け止められるようになる」「自分なりのイメージを描ける」と述べ、白尾(2023a)は、「単元をひとつのストーリーとして構成する」と表現している。安井、白尾は、生徒が社会的事象を自分のイメージとして描けることの重要性を指摘している。単元を1つのストーリーとして組み立て、歴史的な事象を自分のイメージとして描きながら見通しを持ち、図1のように「動機・方向付け」「考察・構想・説明・議論」「まとめ・振り返り」の場面を設定した課題追究・解決的な授業展開の過程で「知識・技能」の習得につなげたい。

表2 課題追究・解決的な学習時の「学びの視点」  
【廣島(2017)を参考に作成】

学 び	視 点
主体的	○教材、学習活動を工夫し「問い」を持たせる ○既習学習を想起させ、見通しを持たせる
対話的	○他者との対話や体験の場を設ける ○対話がつながる言語活動を充実させる
深 い	○見方・考え方を用いて追究させる ○振り返りの場を設ける

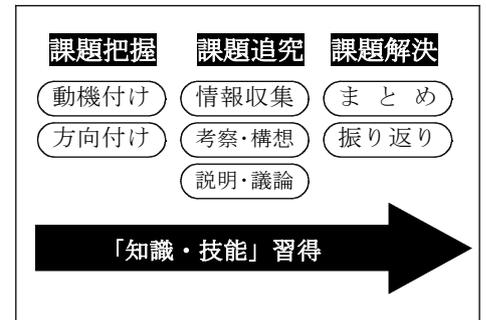


図1 課題追究・解決的な授業イメージ

### (2) 単元「武士の世の始まり」について

本単元では、武家政権がどのように成立し、日本にどのような影響を与えたかを生徒に理解させる。武士の起こりを正しく理解するには、既習した国家体制、税制度まで遡る。班田収授法、墾田永年私財法による律令制度の腐敗や貴族を中心とした朝廷と地方の関係を想起することが重要であり、武士の出現は、「土地」「荘園」「領地」と深い関わりがあることをおさえない。「武士の始まり」のイメージとして、武士には、地方における「領地」を守ることから武装した者と、中央政府における護衛のために武装した者に着目させる。武家政権成立までの過程では、保元の乱・平治の乱によって、朝廷の政治に平氏や源氏等の武士の影響力が大きくなり、平清盛の平氏優先的な政治への不満によって源平の争乱を経て鎌倉幕府が成立する。鎌倉幕府の成立当初の政権基盤は不安定なものであったが、承久の乱以降、幕府は東国から西国まで勢力を伸ばすことになる。武士の出現から鎌倉幕府成立、勢力拡大までの筋道を課題追究・解決的な授業を通して理解させる。

また、鎌倉幕府と朝廷、国司と地頭のように二重支配をされる農民目線、承久の乱における後鳥羽上皇(朝廷側)と北条政子(幕府側)の目線など視点を変えることにより、中世の二元的な政治秩序を大きく捉えることができると考える。武士社会が与えた影響や現代につながる武士の精神へとつなげ、平安時代から鎌倉時代、貴族社会から武士社会へと変化する経緯を踏まえて本単元の指導計画を作成する。

### 3 見方・考え方を働かせる「問い」の活用

#### (1) 見方・考え方を働かせる

歴史的な事象をどのような視点で捉え、どのような方法で思考するのが重要である。『社会編』は課題解決的な学習において、歴史的な事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想したりする際の「視点」「方法」と述べている。単元の見通しを立てる際、見方・考え方をどのように働かせるかを明確にした単元構成とする。澤井(2017)が図2でイメージしているように「見方・考え方」を働かせることで、資質・能力を育成する歯車のような機能していることがわかる。歴史的な事象について「見方・考え方」を働かせながら課題解決に向かい、「思考力・判断力・表現力等」を育みながら「知識・技能」を活用しながら習得されると考える。

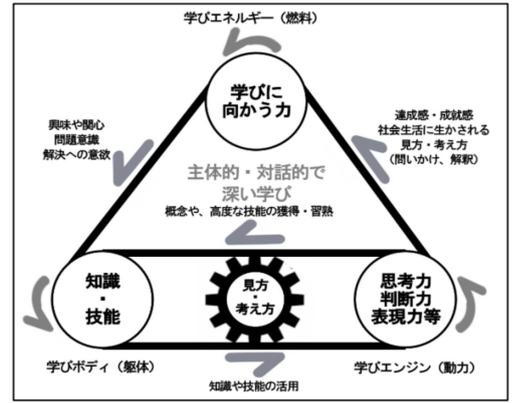


図2 見方・考え方のイメージ 澤井(2017)

#### (2) 「問い」と振り返りの活用

「問い」について、次のような見解をしている。「認識された現状との『ずれ』がある時に『問い』が生じる」加藤(2017 p.56)、「二つの歴史学の成果から導き出された具体的な事実があって初めて、子どもはそこにストーリーを感じ、事実や判断を検証するための『問い』が必要であることを感じる」白尾(2022 p.33)。子どもに「ずれ」を生じさせる歴史的な事象を焦点化し、課題追究・解決的な学習をする過程で、「問い」を基に「見方・考え方」を働かせることが重要である。

小原(2021)は「本質的な問い」について「社会を知る」「社会がわかる」「社会をつくる」の3つに分類している。加藤(2017)は主体的に学習に取り組んでいる生徒から生まれる、新たな「問い」を「活動誘発型」「疑問追究型」「欲求実現型」「自己評価型」で示している(表3)。

本研究では、「社会がわかる」を中心とした見方・考え方働かせる「問い」(表4)「ストーリー」をベースとした歴史カード(図3)を活用する。また、振り返り記述から、新たな「問い」を見取り、活用する授業展開につなげたい。

表3 「振り返り」から見る新たな「問い」 加藤(2017)を基に作成

区分	新たな「問い」	生徒の振り返りの例
あ	活動誘発型の問い	「え、本当」「おかしい、変だ」
い	疑問追究型の問い	「なぜ、どうして」
う	欲求実現型の問い	「調べてみたい」「考えてみたい」「やってみよう」
え	自己評価型の問い	「何が、どこまで解決できたか?」「何が解決しなかったか?」「どうしてうまく解決できなかったのか?」「どうしたらもっとうまく解決できるのか?」

表4 「見方・考え方」「問い」を活用した理解型授業論 小原(2021)を基に作成

内容的目標	区分	学習展開	発問構成	見方・考え方
社会がわかる(説明的知識)	A	事実	「いつ」「どこで」「誰が」「どのように」	ア 時代 イ 年代 ウ 推移 エ 相互関連 オ つながり
	B	目的論	「なぜ」「どうして」	
	C	社会的意味	「どのような変化があった」	
	D	歴史的意義	「どのような影響があった」	
	E	特色	「どのような特色が生まれた」	



図3 歴史カード

### 4 ICTの利活用と保護者参加型の自学自習

#### (1) ICTの利活用

主体的・対話的で深い学びに向かう課題追究・解決的な授業における「考察」「構想」「説明」「議論」する場面でICTを有効に利活用したい。そこで、Google jamboard(図4)を使い、効率的な生徒間の情報共有や対話を促す。また、知識・技能習得の補助として授業の中で学習すべき「基礎的知識」「重要語句」等をGoogle formsを活用したドリル学習(図5)を実施することにより「考察」「構想」「説明」「議論」の時間を多く生み出す有効な方法になると考える。浅野(2017 p.47)は、「各教科で最低限につけてほしい基礎知識は『効率よく吸収する』ことが必要」とICTを利活用した学びの在り方について提言している。「GIGA スクール構想」による1人1台端末配備を絶好の機会と捉え、ICTを利活用した授業づくりにつなげたい。

## (2) 保護者参加型の自学自習

課題把握の過程で単元を貫く「問い」につながる手立てとして、保護者参加型の自学自習を促す。授業の中で多種多様な意見共有や議論が深まると考える。授業時のストーリーで重要となる歴史的事象を「自分ごと」に変換したミッション（図6）を事前学習に設定し、学校と家庭を繋げるユニークな内容とする。自学自習について、沖縄県教育庁義務教育課『自学自習ガイド』では「自己調整しながら継続」と述べている、授業と連動した家庭における事前学習を生徒が自己調整していくことは、主体的・対話的で深い学びに向かう効果があると考えられる。

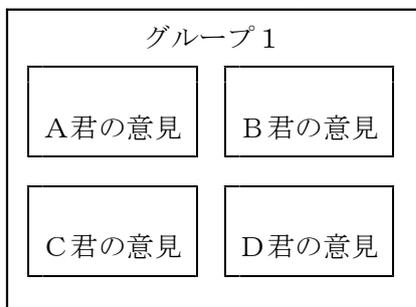


図4 Google jamboard画面イメージ

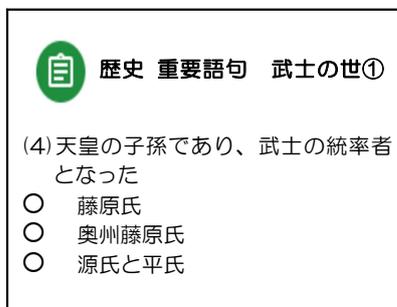


図5 ドリル学習Google forms



図6 歴史的事象「自分ごと」変換

## IV 検証授業

- 1 単元名 「武士の世の始まり」
- 2 単元を貫く問い 「武士はどのように成り上がり、どのような影響を与えたのだろうか？」
- 3 単元設定の理由
  - (1) 教材観（省略）
  - (2) 生徒観（省略）
  - (3) 指導観（省略）
- 4 単元の指導目標・評価規準

表5

単元目標	知識および技能	武士が台頭し武家政権が成立するまでの過程や時代背景について、歴史的事象を基に情報を集め、読み取り、まとめる技能を課題追究・解決する過程で身に付ける。
	思考力・判断力・表現力等	武士が台頭し武家政権が成立するまでの過程や主従関係、政治・文化の特色について、見方・考え方を働かせる「問い」を基に、考察・構想し説明したり議論する力を養う。
	学びに向かう力 人間性等	武士が台頭し武家政権が成立した背景や課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、この時代と現在と結びつくものがあることを気付かせ、日本の歴史や伝統を大切にする精神を養う。
評価規準	知識・技能	①既習した平安時代の貴族の様子を想起している。 ②武士が台頭した理由が土地をめぐる争いから発展していることを理解している。 ③院政や平氏と源氏の争いを基に武士が政治の実権を握ったことを理解している。 ④鎌倉幕府の主従関係や執権政治確立が承久の乱と関連していることを理解している。 ⑤武士気風にあった力強い文化と庶民への広がりや現在との結びつきを理解している。 ⑥武士が政権を成立するまでの過程や特色をつなげ、まとめることができる。
	思考・判断・表現	①単元を見通し、武家政権成立までの過程を予想しながら、考察・表現している ②土地の利害関係から武士が台頭した要因や過程についてを考察・表現している。 ③武士の不満と平氏滅亡の因果関係について考察・表現している。 ④武士の主従関係を幕府の危機を救った政子の演説を基に考察・表現している。 ⑤武士の精神や庶民的作品を基に現代とのつながりについて考察・表現している。 ⑥武士が成り上がった過程をストーリーとして表現（説明）することができる。
	主体的に学習に取り組む態度	★武士が台頭した時代について、武士の置かれた社会的な状況を考慮して、生徒自身の考えを反映させながら、ねばり強く追究しようとしている

5 単元の指導計画

過程	学 習 活 動	問 い (見方・考え方) ※表4参照
1 課題把握	①活動を誘発する発問 ②単元を貫く「問い」を生徒・保護者の意見を共有しながら予想する。 ③予想したストーリーを表現(説明)する ④課題追究方法を提示する。 ⑤本時の学習を振り返る。 ※新たな「問い」	課題発問 <b>発問 B(目的論)</b> <b>見考 ウ(推移)</b> 武士はなぜ、成り上がることができたのだろうか？  次時につながる「問い」 <b>発問 A(事実)</b> <b>見考 ウ(推移)</b> 武士はどのように現れたのだろうか？(予想)
2 課題追究	①活動を誘発する発問。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">武士の出現</span> ②本時の課題追究を投げかける。 ③課題追究。(歴史カード1～4・教科書・PC) ④共有・説明する。(ジグソー法的な調べ学習・Jamboard) ⑤代表討論(第1話)でさらに追究 ⑥ストーリーをまとめる ⑦本時の学習を振り返る。 ※新たな「問い」	課題発問 <b>発問 D(歴史的意義)</b> <b>見考 エ(相互関連)</b> どのように武士は出現したのだろうか？ 追究① 貴族や大寺社の特権にはどのようなものがあるのか？ 追究② なぜ地方では武装する人々が現れたのだろうか？ 追究③ 武士はどのような方法で武士団に成長したのだろうか？ 追究④ 平将門の乱や藤原純友の乱はどのような影響を与えたのだろうか？
3 課題追究	①活動を誘発する発問。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">武士の不満</span> ②本時の課題追究を投げかける。 ③課題追究。(歴史カード5～8・教科書・PC) ④共有・説明する。(ジグソー法的な調べ学習・Jamboard) ⑤代表討論(第8話)でさらに追究 ⑥ストーリーをまとめる ⑦本時の学習を振り返る。 ※新たな「問い」	課題発問 <b>発問 D(歴史的意義)</b> <b>見考 エ(相互関連)</b> 武士は、どのような不満があったのだろうか？  追究⑤ なぜ、後三条天皇は「院政」を行ったのだろうか？ 追究⑥ 武士はどのような理由で紛争を起こしたのだろうか？ 追究⑦ 保元の乱、平治の乱はどのような理由で起こったの？ 追究⑧ 源氏は平氏に対してどのような不満があったの？
4 課題追究	①活動を誘発する発問。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">鎌倉幕府危機一髪</span> ②本時の課題追究を投げかける。 ③課題追究。(歴史カード9～12・教科書・PC) ④追究した内容を Jamboard を活用しながら共有・説明する。(ジグソー法的な調べ学習) ⑤代表討論(第12話)でさらに追究 ⑥ストーリーをまとめる ⑦本時の学習を振り返る。 ※新たな「問い」	課題発問 <b>発問 D(歴史的意義)</b> <b>見考 エ(相互関連)</b> 鎌倉幕府はどのような危機があって、どのように乗り越えたのだろうか？ 追究⑨ 「征夷大將軍」略して將軍。本来の役職って何だろうか？ 追究⑩ 幕府が与えた「御恩」にはどのようなものがあったのだろうか？ 追究⑪ 二重支配された農民はどのように苦しかっただろうか？ 追究⑫ なぜ、御家人は幕府側を信じたのだろうか？
5 課題追究	①活動を誘発する発問。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">武士の世界</span> ②本時の課題追究を投げかける。 ③課題追究。(歴史カード13～14・教科書・PC) ④共有・説明する。(ジグソー法的な調べ学習・Jamboard) ⑤ストーリーをまとめる。 ⑥本時の学習を振り返る。 ※新たな「問い」	課題発問 <b>発問 E(特色)</b> <b>見考 オ(つながり)</b> 武士はどのような影響を与えたのだろうか？現代につながる武士の精神にはどのようなものがあったのだろうか？ 追究⑬ 現代につながる武士の精神や庶民的作品にはどのようなものがあるだろうか？ 追究⑭ 人々はなぜ仏教に救いを求めたのだろうか？
6 課題解決	ストーリー(1話～14話) ▶ つなげる ▶ 表現(生徒による記述問題作成) ▶ 単元を貫く「問い」 ▶ 課題解決	

## 6 「単元を貫く10の実践」

### A ストーリー型単元

本単元を4部（全14話）で構成する。授業を連続するストーリーで組み立てる。

第1部 武士の出現	（第1話～第4話）	第2部 武士の不満	（第5話～第8話）
第3部 鎌倉幕府危機一髪	（第9話～第12話）	第4部 武士の世	（第13話～第14話）

### B ワークシートの活用 ※ QRコード参照

全6時間の単元における学習内容や振り返りの変化がわかるように、課題把握の「予想」、課題追究の「追究する」、課題解決の「振り返る」をワークシート1枚にまとめる。

### C 代表討論

課題追究（第2～第4時）、さらに理解を深めるように代表2名の生徒が、歴史的事象で登場する人物を追体験する。それぞれの歴史的背景を考え、その立場でメリット・デメリットを主張。残りの生徒は、その討論を聞いて歴史的事象について選択・判断する。

### D 生徒による記述問題作成

課題解決時（第6時）、追究した内容をさらに深めるように、生徒自身が作成する。作成後は、実際に問題を解き合い、学習内容を振り返る。本単元終了後の定期テストで出題、授業と連動。

### E 歴史カードの活用 ※ QRコード参照

「社会がわかる」を中心とした見方・考え方を働かせる「問い」を活用する方法として、ストーリー性のある歴史カードを活用する。表面にタイトル、裏面にストーリーと「問い」で構成。「課題追究」「ストーリー」「問い」を結びつける。

### F 振り返り・新たな「問い」の活用 ※ 表4参照

授業後、生徒から生まれた、新たな「問い」より、学習理解度や主体的に学習に取り組んでいる生徒の状況を把握し、次時に活用する。

### G Google jamboardの活用 ※ 図4参照

課題追究時に活用する。歴史カードの「問い」と「ストーリー」を基に、教科書・ICTを活用して自由な情報選択を行い、Google jamboardに入力する。グループ内での共有と他グループの追究内容が共有できる利点がある。

### H ドリル学習Google forms ※ 図5参照

授業における「重要語句」の簡単な説明を問う選択問題形式。Google classroomに授業ごとで分類したドリルを添付し、予習・復習を生徒が自己調整しながら進める方法で実施、知識・技能の習得を補助する。

### I 歴史的事象を「自分ごと」に変換 ※ 図6参照

歴史的事象を「自分ごと」に捉えることができるように、身近な状況へと変換する。第1時の課題把握の場面では、平安・鎌倉時代、「財」の基本であった「土地」から、現在の「お金」「ボーナス」に変換したミッション。歴史的事象の構図を「自分ごと」に変換することで、課題追究時、ミッションの構図と結びつけることができると考える。

### J 保護者参加型の自学自習

「自分ごと」に変換したミッションを保護者も一緒になって考えさせる。生徒と保護者では異なる意見を共有できると考える。保護者を巻き込む事により「考察」「構想」「説明」「議論」が深まり、活発になると考える。

武士の世の起こり  
「ワークシート」  
「歴史カード」  
有効期限2024. 2. 28



QRコード

7 本時の指導

(1) 本時のねらい

単元の見通しを立て、ストーリー化した予想を基に「考察」「構想」「説明」「議論」することができる。

(2) 授業仮説

ストーリー化を通じた、単元を貫く「問い」を設定し、活用することで、見方・考え方を働かせながら課題追究に向かう生徒主体の授業が展開できるであろう。

(3) 検証の観点

- ① 「問い」の活用が効果的であったか
- ② 生徒が主体となった課題追究的な授業であったか
- ③ 「対話的」「協働的」な学びが見える授業であったか

※表5参照

- 知** 知識・技能
- 思** 思考・判断・表現
- 主** 主体的に学習に取り組む態度

(4) 本時の展開

過程	学 習 活 動	教師の手立て	評価
動機 方向付け 導入 10分	<b>STEP1 活動を誘発する発問</b> 教師 5分 活動を誘発する発問 あなたは、芸能事務所ナカマーズ所属のアイドル！これまでお世話になったマネージャーが新しく芸能事務所イシミネーズを設立。ナカマーズに残る？イシミネーズに移籍する？	・生徒の発想	<b>主★</b>
	<b>STEP2 本時の課題を投げかける</b> 教師 5分 課題発問 鎌倉幕府、危機一髪！どのような危機があって、どのように乗り越えたのだろうか？ ② 第3部 第9話～第12話の歴史カードの説明 歴史カード第10話「御恩と奉公」、第12話「承久の乱」と活動を誘発する発問の関連性 ※QR参照	・保護者の発想 →多種多様な意見を共有  【提示】歴史カード 既習 第1話～8話 本時 第9話～12話	
考察・構想・説明・議論 情報収集 つなげる まとめる 展開 35分	<b>STEP3 第3部「鎌倉幕府危機一髪」について追究</b> 対話・協働 15分 課題発問 第09話 鎌倉幕府成立 「征夷大將軍」略して將軍。本来の役割って何だろうか？ 第10話 御恩と奉公 幕府が与えた「御恩」には、どのようなものがあったのだろうか？ 第11話 二重支配 二重支配された農民はどのように苦しかったのだろうか？ 第12話 承久の乱 なぜ、御家人は幕府側を信じたのだろうか？	※ A	<b>知④</b> <b>思④</b>
	③ 第3部 グループで追究する（1人1話） ワークシートに記入する ※QR参照	※ B ・タブレット、教科書など 自由な情報選択	
	<b>STEP4 追求した内容を共有・説明する</b> 共有 5分 ④ 追求した内容をグループ内で共有・説明する→Google jamboard ・ファシリテーター（生徒進行） ・4名×8グループ	※ G ・課題解決のサポート ・ジグソー法的な調べ学習	
	<b>STEP5 代表討論でさらに追究する</b> 対話 10分 ⑤ 承久の乱について、「朝廷側」「幕府側」「御家人」の立場になって追体験 「朝廷側の生徒」→朝廷のメリット、幕府のデメリットを訴える 「幕府側の生徒」→幕府のメリット、朝廷のデメリットを訴える 「御家人の生徒」→どちら側に味方するかを判断	※ C ・それぞれの視点で承久の乱について考えさせる	
<b>STEP6 本時のストーリーをまとめる</b> 説明 5分 ⑥ 「征夷大將軍」→朝廷から与えられた権威 「御恩と奉公」→將軍と御家人の主従関係 「二重支配」→朝廷の国司、幕府の地頭による二重支配 「承久の乱」→承久の乱後の影響・・・六波羅探題 御成敗式目	・承久の乱後の影響について 板書→ワークシート記入		
振り返る 終末 5分	<b>STEP7 本時の学習をまとめ、振り返る</b> 生徒 5分 ⑦ 予想した。単元を貫く「問い」の根拠や新たな「問い」をノートに記入 ▶「え、本当」「おかしい、変だ」・・・あ ▶「なぜ、どうして」・・・い ▶「調べてみたい」「やってみたい」・・・う ▶「どうしたらもっとうまくできるのか」・・・え ※表3参照	・生徒の振り返りから 新たな「問い」が生まれるか あ 活動誘発型の問い い 疑問追究型の問い う 欲求実現型の問い え 自己評価型の問い	<b>主★</b>

## V 研究の結果と考察

仮説を基にした「武士の世の始まり」の単元における検証授業から、「課題追究・解決的な授業の効果」「見方・考え方を働かせる『問い』の活用の効果」を前述した「単元を貫く 10 の実践」**A**～**J**を活用した場面から考察・検証する。

### 1 課題追究・解決的な授業による効果

#### (1) **A** ストーリー型単元 **B** ワークシートの活用

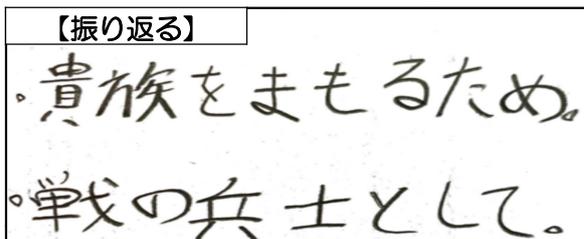
第1時の課題把握の場面で重要なことは、単元に見通しを立てることである。本単元で重要なキーワードは「土地」「平治の乱」「保元の乱」「承久の乱」である。これらの歴史的事象を想起させながら見通しを立てた。生徒が予想した内容（資料1）から「土地」「報酬」「ほうび」というワードが多く出てくることから「土地制度」「荘園」をベースとしたイメージで予想し、見通しを立てることにつながったと考える。単元をストーリーで4部構成（全14話）にしたことも段階的に歴史的事象の背景をイメージさせることにつながる要因であったと考える。

どのように武士は出現したの？	どのような不満があったの？	どのような危機があつてどのように乗り越えたの？	武士が与えた影響は？どのような世界？
【予想する】 土地が貴族を守るために武士が誕生した。	【予想する】 貴族からのようまがなごが増え、不満がたまった。こほうびが知られていく。	【予想する】 土地が奪はれるなどの危機があつた。取りかかす。	【予想する】 武士が増え、貴族からのようまがなくなりなつていく。こほうびが知られる。

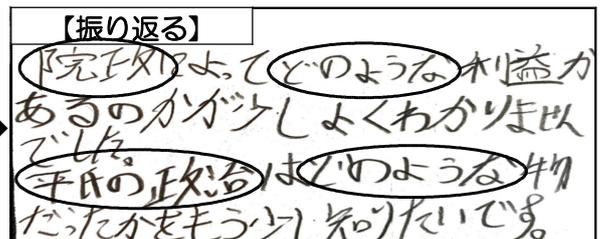
資料1 「土地」「報酬」をベースとした予想

第1時の課題把握、それ以降の課題追究から課題解決までの振り返りを比較してみると内容に変化があることがわかる。課題把握の時点では、抽象的な表現が多い（資料2）のに対して、第2時以降、重要語句を活用した表現に変化している（資料3）。基礎的知識を習得・活用しながら課題追究に向かうことで、振り返りもより具体的な表現に変化したと考える。

第1時の課題把握、それ以降の課題追究から課題解決までの振り返りを比較してみると内容に変化があることがわかる。課題把握の時点では、抽象的な表現が多い（資料2）のに対して、第2時以降、重要語句を活用した表現に変化している（資料3）。基礎的知識を習得・活用しながら課題追究に向かうことで、振り返りもより具体的な表現に変化したと考える。



資料2 第1時の振り返り（生徒A）



資料3 第3時の振り返り（生徒A）

#### (2) **C** 代表討論

第4時における承久の乱について代表2名が「幕府側」「朝廷側」に立ち、代表以外の生徒は「御家人」に立ち、その討論を聞いて判断した。「幕府側の北条政子」「朝廷側の後鳥羽上皇」について調べるよう依頼。教師側の説明がない状態での討論であったが、主体的な学びを感じるものであった。朝廷側の主張は源頼朝不在となった幕府の不安定性を訴える。それに対して、幕府側の主張は、平安時代における武士の低い身分についてを訴える。朝廷側は地位向上や報酬の正当性、国をまとめる力と法整備について主張。幕府側は平治の乱、保元の乱を武士の力で解決したことや御恩と奉公を想起する内容を主張する（資料4）。生徒は討論を御家人側に立って選択、判断している姿があった。白尾(2023a)は、「生活レベルで判断できるようリアリティーに変換している。残りの生徒は、『自分ごと』として歴史的な事象を捉えている」と評価した。グループ内でそれぞれの立場に立った討論ができると理解がさらに深まると考える。

	<b>【朝廷側に立った生徒】</b> ① 3代で途絶えた源氏と不安定性 ② 朝廷の官位制度と報酬の正当性 ③ これまで国家をリードしてきた事実と充実した法整備
	

資料4 代表討論に向けた主体的な学び

白尾(2023a)は、「生活レベルで判断できるようリアリティーに変換している。残りの生徒は、『自分ごと』として歴史的な事象を捉えている」と評価した。グループ内でそれぞれの立場に立った討論ができると理解がさらに深まると考える。

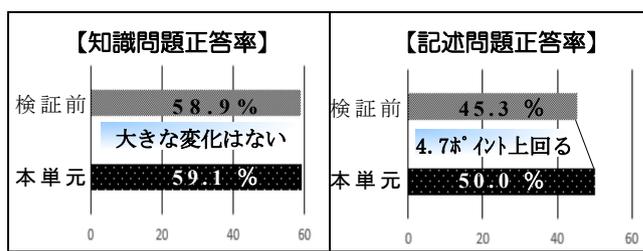
(3) **D** 生徒による記述問題作成

第6時では、生徒による記述問題を作成した(資料5)。生徒Aが承久の乱前後の「変化」を問う出題に対して、生徒Bは「事実」を問う出題になっている。生徒の歴史的事象の理解度が表れている。記述問題作成のようなパフォーマンス課題を実施する際、中心となる「問い」と理解すべき内容を教師が整理することで効果が上がると考える。白尾(2022b)から『本質的な問い』を明確に持ち、解決する過程で『永続的な理解』を得ると助言があった。本単元終了後の定期テストでは、検証前の単元と本単元の正答率を比較した(資料6)。第1章(検証前)から①知識を問う問題(55点)を出題、思考を伴う記述問題(10点)、本単元から①15点②10点を出題した。①の正答率に大きな変化はなく②は本単元が4.7ポイント上回った。この結果から「生徒に委ねる」課題追究・解決的な授業は、思考力を育むと同時に、「知識・技能」を習得することに効果的であると考える。

また、思考を伴う記述問題(5問)中、生徒が作成した記述問題(2問)の正答率を比較すると、生徒が作成した記述問題の正答率が28.1ポイント上回り、関心が高かった。

<b>生徒B【社会的意味(変化)を問う出題】</b>
<b>問題</b> 承久の乱の前後で、幕府の勢力は <u>どのように変化</u> しましたか?
理解度 高
<b>生徒C【事実(人物)を問う出題】</b>
<b>問題</b> 承久の乱にて、上皇は幕府軍に負けました。 <u>誰が</u> 負けましたか?
理解度 低

資料5 生徒が作成した記述問題(第6時)



資料6 検証前と検証後(本単元)の定期テスト正答率

2 見方・考え方を働かせる「問い」の活用による効果

(1) **E** 歴史カードの活用

歴史カードにある「問い」を基に課題を追究している姿があった(写真1)。その過程で情報を収集し、まとめていた。まとめ方の視点を与えることで情報収集の時間が短縮された。視点を揃え、少しずつ情報量を減らしながら見方・考え方をさらに働かせることができる。第4時では、源頼朝の鎌倉幕府成立のイメージが強くなりがちであるが、振り返りから、六波羅探題設置や御成敗式目制定など、承久の乱後の影響について述べる生徒が多くなった(資料7・8)。歴史カードの追究内容が歴史的意義の「問い」中心であったことが要因と考える。

六波羅探題や征夷大將軍の役割がわかった。御成敗式目についてあまり理解できなかったので調べたい。

資料7 生徒Dの振り返り記述

承久の乱は北条政子の演説により幕府側に味方する人が多くなったとわかりました。官職とは何か知りたいです。

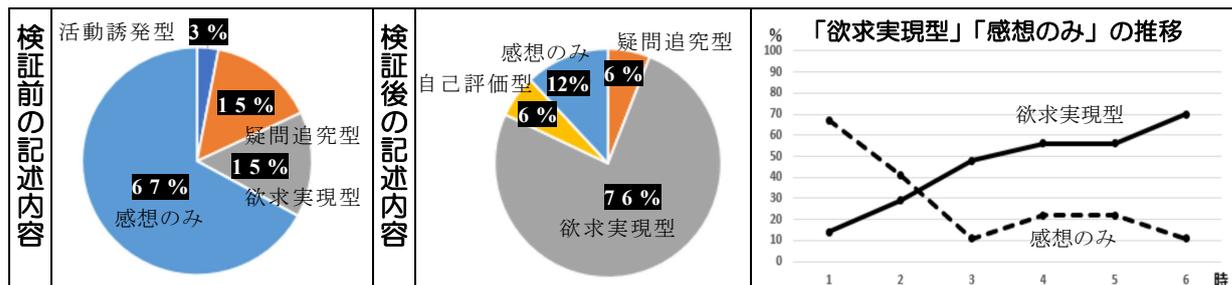
資料8 生徒Eの振り返り記述



写真1 歴史カードを基に追究

(2) **F** 振り返り・新たな「問い」の活用

課題把握(第1時)では、授業の感想記述中心であったが、課題追究に向かうにつれて、欲求実現型の新たな「問い」を多く記述するようになった(資料7・8)。授業感想の記述から欲求実現型を中心とした記述へ変化している(資料9)。主体的・対話的で深い学びに少しずつ近づいていると考える。このような、新たな「問い」を次時で効果的につなげる工夫が必要である。



資料9 生徒の「振り返り」による記述内容の変化

### 3 ICTの利活用と保護者参加型の自学自習による効果

#### (1) G Google jamboardの活用

「考察」「構想」「説明」「議論」の場面では、Google jamboardの機能(資料10)が有効であった。端末上で他グループの追究内容も参考にしながらインターネットや教科書の情報を自由に選択するなど、協働的に学ぶ姿があった。「情報収集」から「対話」「協働」へと生徒が主体的に課題追究しているため、教師は生徒の支援や評価を行うことができた(写真2)。4つの「問い」をジグソー法的な調べ学習により課題追究の内容を共有したが、端末上の記録とワークシート上への記入のバランス、前時や前単元を振り返ることができる工夫が必要であった。

<p>第9話「征夷大將軍」本来の役職とは何だろうか？</p> <p>もともとは蝦夷を討つため</p>	<p>第10話「御恩」にはどのようなものがあったのか？</p> <p>御家人は幕府から新たな領地や守護・地頭の職をもらった</p>
<p>第11話 二重支配された農民の苦しみとは何だろうか？</p> <p>農民は荘園領主や地頭から税を取り立てられた</p>	<p>第12話 なぜ御家人は幕府を信じたのだろうか？</p> <p>北条政子の演説により御家人に対して支持を集めた</p>



資料10 課題追究時(第4時)のGoogle jamboard画面

写真2 課題追究時、生徒に支援をする場面

#### (2) H ドリル学習の活用 (Google forms)

本単元だけでも30余りの重要語句がある。授業実施前の事前学習であるドリル学習を活用し、教師が教える場面を極力抑えた。重要語句の説明を厳選、「生徒に委ねる」ことにより、知識の習得が疎かになることを懸念していた。しかし、第1時の重要語句である「荘園」を例に挙げると、歴史カードの「問い」を追究する過程で、重要語句である「荘園」を活用した記述になっていることがわかる(資料11)。生徒は「問い」を追究する課程で、ドリル学習で事前に調べた「荘園」を結び付けたと考える。ドリル学習による重要語句の出題と歴史カードの「問い」の作成は連動している。生徒が重要語句を活用することを意図して「問い」を構成した。ドリル学習では、重要語句を印象づける程度のレベルで学習する。生徒は、「問い」を追究する課程で「思考」をしながら、「知識」を習得・活用したと考える。

ドリル学習 ▶ 授業 ▶ 課題追究  
 「荘園」印象 説明厳選 「荘園」活用

【追究する】なぜ、地方では武装する人々が現れたのだろうか？

① 荘園の権利や境界をめぐって紛争が起きる。  
 ② 荘園は社会を支える重要な存在だ。

資料11 生徒の追究内容と重要語句の関係

#### (3) I 歴史的事象の「自分ごと」変換

第4時、承久の乱における朝廷側と幕府側の立場や御家人が迷う構図を芸能界社長、アイドル、マネージャーの関係性に変換した。保護者・生徒は、承久の乱の構図が一切わからない状況でミッションを家庭で考えた。保護者は、「安定」のナカマーズに立つ回答が多く、生徒は、「挑戦」のイシミネーズに立った回答が多かった(資料12)。授業のなかで、芸能界に変換した構図と歴史的事象である「承久の乱」の構図を結びつける姿があった。保護者・生徒の多種多様な意見を共有することで、課題追究を誘発し、「考察・構想・説明・議論」を深めることにつながった。「自分ごと」変換は、歴史的事象に対する興味・関心を高め、歴史的背景を掴みやすくすることに効果的である。

MISSION あなたは芸能事務所ナカマーズに所属するアイドル！  
 これまでお世話になってきたマネージャーが新しく芸能事務所イシミネーズをつくります。  
 ナカマーズに残る？イシミネーズに移籍する？

ナカマーズ芸能事務所  
 ①多くのアイドルが所属  
 ②芸能事務所で一番大きい  
 ③仲間社長は、テレビ会社との関係が大きくバラエティ番組に多くのアイドルを出演

イシミネーズ芸能事務所  
 ①あなたを育てたマネージャー  
 ②あなたを日本トップアイドルに成長させてくれた  
 ③海外進出も狙っている

・ナカマーズ芸能事務所は大きくテレビ会社との関係もあり、残った方が無難(保護者)  
 ・自分を育ててくれたマネージャーとの信頼関係が大切だから(生徒)

資料12 保護者・生徒の回答例(変換ミッション)

#### (4) J 保護者参加型の自学自習

保護者アンケート（資料13）から、「生徒と保護者が一緒に考え議論した」「子どもとの意見の違いに驚いた」「授業でどのように活用するのか気になる」「子どもとの会話が増えた」など、肯定的な意見が視えた。授業と保護者を巻き込んだ自学自習の連動は、保護者とながらながら、「考察」「構想」「説明」「議論」を深めることができたと考える。

- ・身近な出来事に置きかえることで興味を持って学習してくれそうです。
- ・このミッションが授業でどのように活用されたのか興味があります。
- ・子どもとの会話が増えて良かった。
- ・家族で意見を出し合い話し合った。

資料13 保護者アンケート（抜粋）

#### 4 「単元を貫く10の実践」による効果

- (1) **A** 授業をストーリーでつなげることにより、単元を貫いた学習を促すことができる。
- (2) **B** ワークシートを1枚に集約すること、振り返りの変化や学習状況を一度に確認できる。
- (3) **C** 代表討論により、歴史的事象を生活レベルでリアリティに判断することに有効。
- (4) **D** 記述問題作成によって、生徒の学習理解度を確かめることができる（評価できる）。
- (5) **E** 歴史カードの活用は、「問い」を中心とした生徒主体の活動を促すことにつながる。
- (6) **F** 課題追究・解決的な授業を進めるにつれて、振り返りが変化、新たな「問い」が生まれる。
- (7) **G** Jamboardの活用は、グループ内・学級生徒全員の意見を参考に学習することができる。
- (8) **H** ドリル学習による事前学習で、教師が教える場面を抑え、厳選することができる。
- (9) **I** 「自分ごと」変換は、生徒が歴史的事象への興味・関心を高め、背景を掴みやすくする。
- (10) **J** 保護者参加型の自学自習は、保護者とながら「考察・構想・説明・議論」を深める。

## VI 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 歴史的事象の課題を追究する**A～D**の実践から、「情報収集」「考察」「構想」「説明」「議論」の過程で「知識・技能」は習得され、主体的・対話的で深い学びにつなげることができた。
- (2) 見方・考え方を働かせる**E～F**の実践から、「問い」をベースとした生徒主体の活動をするにより「学び方」が身に付き、生徒を支援する場面が多く生み出された。
- (3) ICTの利活用と保護者を巻き込む自学自習に向けた**G～J**の実践から、「対話」「協働」の場面を多く生み出すことや授業を通して保護者とながらることができた。

### 2 課題

- (1) 課題追究時のまとめ方の視点について、定型文の情報量を減らしながら、見方・考え方をさらに働かせる。
- (2) 新たな「問い」を次時の授業で活用する。
- (3) 端末上の記録とワークシート記入のバランスおよび単元全体の振り返り。

### 〈 主な参考文献・引用・助言 〉

- 沖縄県教育委員会『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ』 2022年
- 沖縄県教育委員会『問いが生まれる授業サポートガイド』 2022年
- 沖縄県教育庁義務教育課『自学自習ガイド』 2022年
- 白尾裕志『歴史地理教育（対馬丸事件から戦争と平和を考える）』 歴史教育者協議会 2022年
- 白尾裕志『指導講師検討会』 2022a・10.21 / 2022b・12.1 / 2023・2.2
- 小原友行『社会科教育（社会科における「本質的な問い」と発問の相関）』 明治図書出版 2021年
- 安井俊夫『歴史地理教育実践選集』（子どもが動く社会科が提案しているもの） 新興出版社 1982年

# 本検証授業研究会の記録

本検証授業実施期日：令和5年1月25日（水）

検証の観点	①「問い」の活用が効果的であったか ②生徒が主体となった課題追究的な授業であったか ③「対話的」「協働的」な学びが見える授業であったか
-------	---

## 1 研究討議

- 授業者 ○前時の「振り返り」本時につなげることは課題が残る。課題把握の第1時の予想をもとに歴史カードの「問い」を活用しながら、教師が説明する場面を極力抑え、生徒に委ね、「対話」「協働」を中心とした授業を意識した。
- 参観者 ○ジグソー法的な調べ学習が、対話的な学を引き出している。  
○タブレットで調べるなかでも色々な情報を取捨選択して、それでもわからない所を対話で共有している。対話が安心してできる環境であった。
- 県教委義教課 ○終盤で、子ども達の頷きを観察すると、子ども達のなかでストーリーが繋がっていると思う。調べたことをアウトプットしている授業であった。  
○教師側の指示をあまり出さず、活動できていた新しい学びだったと思う。  
○県の施策 P・P II の重点事項である「自立した学習者の育成」の主体的に学ぶ授業と自学自習の連動を意識している。知識伝達型から主体的に学ぶ授業へのシフトチェンジをしている。
- 主任指導主事 ○歴史を「自分ごと」にしたり、生活とつなげている。本質的な問いについても意識している。  
○歴史的背景を考えたり、発展した「問い」が出てくると良い。  
○子ども達が全員参加する授業であった。

## 2 講評 琉球大学教職大学院

教授 白尾 裕志

- 中心課題を明確にして、キーワードとして残しながら討論をしていく事が重要。
- 授業改善には「方法論」と「内容論」がある。方法論に流れるのは気をつけること。
- 資質・能力の3つの柱である「知識の習得」は「思考」とセットである。「知識」はいずれ欠落するので、「問い」「思考」とセットで「知識」を習得する
- 日常レベルに置きかえて課題を出し、授業と関連付けている。独創的である。日常レベルから社会的事象を捉えている。
- ストーリーとリアリティ。ストーリーが強すぎると教え込みになってしまう。子どもたちの意見を拾い、目標に向かって行くには、授業者の単元計画が必要である。
- 追究する際の定型文は、支援を要する生徒への手立てにもなっていた。
- 承久の乱では、権威＝権力についてや権力が移ったイメージを持たせるには、生徒の代表討論が効果的となっていた。承久の乱前後の権力の変化を授業者が持っているかが大切である。
- 授業の終盤はストーリーをしっかりまとめることが必要である。